

「令和元年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	喜多方市立第二中学校、第一小学校
推進協力校名	喜多方市立松山小学校、上三宮小学校

全ての子ども「生きる力」を育む

喜多方市では、喜多方市立第二中学校（パイロット校Ⅰ）、喜多方市立第一小学校（パイロット校Ⅱ）、喜多方市立松山小学校、喜多方市立上三宮小学校（推進協力校）の4校が、学びのスタンダード推進事業に取り組んできた。各校にて、現職教育及び研究公開を通して授業改善と指導力向上に取り組み、その成果を発表してきた3年間であった。「学びのスタンダード」推進事業の3年目は、各学校において1・2年目の成果を生かし、課題の解決策に取り組んだ結果、本市の学校教育の目標である「全ての子ども「生きる力」を育む」ことができた。

1 推進地域における「授業スタンダード」の活用について

推進地域で協議を行い、「授業スタンダード」を現職教育の授業案に位置付ける取組を行った。現職教育における研究の視点と、「授業スタンダードチェックシート」とをつなげることにより、指導案作成時にチェックシートを振り返る仕組みを整えた。また、単元計画や指導過程に位置付けることで指導すべき内容が明確になった。さらに、事後研究会でもスタンダードの活用を図った。

「授業スタンダードチェックシート」と現職教育のつながり ※パイロット校Ⅱ（第一小学校）の取組から

Ⅱ 求める子どもの姿の具現化に迫るために		＜授業の充実のために＞	
※は授業スタンダードチェックシートの番号を表す。(P10 参照)		番号	項目
視点① ある子どもを中心にすえた学び合いを広げるための授業展開		1	単元(題材)の構想を明確にもっている。
① 子どもが「やってみよう」と思う課題の設定		2	本時のねらいを明確にもっている。
・ 身近なことについて、目的・場面・状況が明確な活動の提示(※4)		3	授業の約束事や学習に向かう心構えを指導している。
② 学び合いの場の工夫		4	子どもの「問い」や「思い・願い」を引き出し、学習課題を設定している。
・ 誰でも関わろうとする力を育む交流のさせ方(※7)		5	子ども一人一人に追究・解決の計画や見通しをもたせている。
③ 子どものコミュニケーションを見取り、充実した活動にするための手立て		6	机間指導で子どもを見取り、適切に支援している。
・ 非言語コミュニケーションの見取り(facial expression, gesture, clear voice 等)(※6)		7	ペア学習やグループ学習を取り入れる目的を明確にもっている。
		8	本時のねらいに迫るように話し合いをコーディネートしている。
		9	本時で学習したことを明確にし、振り返りを工夫している。
		10	新たな学びの目標を向けさせる終末になっている。
		11	授業の流れが分かり、構造的な板書になっている。
		12	吟味し精選された発問をしている。
		13	ノート指導を継続的に行っている。

2 パイロット校の取組内容

(1) パイロット校Ⅰ（第二中学校）の取組について

① 教師同士の学び合いを軸とした授業づくり

数学科では、2学年にわたるタテ持ち、TT、習熟度別学習を実施した。英語科ではTTを実施した。学校の実態、教科の特性に合った教師同士の学び合いができた。具体的には以下のような指導体制をとった。

数学科	1組	2組	3組
1年	A先生	A先生	
2年	B先生（+週1回TT）	B先生（+週1回TT）	C先生（+週1回TT）
3年	C先生（+週1回TT）	C先生（+週1回TT）	B先生（+週1回TT）

② 授業と家庭学習の連動

授業内容と学校や家での生活の連動を図る取組を全教科で実施した。

例① 社会科の公民の授業において、ニュースや新聞の記事を導入に取り上げ、実生活と本時の課題を結びつける。また、授業後の生活においても公民に対する関心を持続させる。

例② 休み時間でも安全にサッカーできるように、どのようなルールがあればよいか生徒自身でまとめ直さ

せ、校外でも自分たちで試合ができるようにする。

(2) パイロット校Ⅱ（第一小学校）の取組について

① 教科担任制の取組について

昨年度までの課題から、3クラスの学年では2クラスずつの教科担任制とし、専門性の高い外国語の教師（右図では5年2組担任）が外国語を横持ちすることを基準として年間時数の似通っている家庭科と交換することとした。

	5年1組	5年2組
5年1組担任 (国語専門)	国語の授業を担当	
5年2組担任 (算数専門)	算数の授業を担当	

	6年1組	6年2組	6年3組
T1	算数専門の教師		
T2	1組担任	2組担任	3組担任

	5年1組	5年2組	5年3組
外国語	2組担任	2組担任	3組担任
家庭科	1組担任	1組担任	3組担任
図工	1組担任	2組担任	1組担任
音楽	3組担任	2組担任	3組担任

1組と2組 外国語と家庭科を交換
3組と1組 音楽と図工を交換

② 「家庭学習スタンダード」の活用について

自己マネジメント力を育成するため、家庭学習の仕方に焦点を当てた「家庭学習チェックシート」を作成した。内容は県のHPに掲載されているものを参考にした。

3 学 習 時 間	①	決まった時こくに学習を始めている。
	②	1日の学習時間をおおよそ決めている。
	③	決めた学習時間の間は、集中して学習している。

家庭学習チェックシート

何のために使うの？

どうやって使うの？

家庭学習チェックシートは、県から配付された「家庭学習スタンダード」をもとに、子どもたちに望ましい家庭学習の習慣を身に付けさせ、「自己マネジメント力」を育むために作られました。喜多方二中学区の小学校で、同じような取り組みを進めています。

大まかな流れは以下の通りです。
①チェックシートをもとに、家庭学習への取り組み方を親子で振り返り、課題を見つける。
②シートから今月の目標を選んで、一ヶ月間取り組む。
③月末に取り組みを振り返り、来月の目標を立てる。
このようにして、1年間継続して取り組んでいきます。

③ 家庭学習通信の発行について

「家庭学習スタンダード」の活用を促すため、家庭学習通信を発行した。保護者から、家庭学習についての悩み事を募り、様々な先生からアドバイスをし、学校と家庭の双方向の活動となるようにした。

「やる気スイッチ」が入るまでは、何度かの声かけが必要としています。なかなかスイッチが入らないときは、スイッチが入っているときのことを話すと、自分でも考えてやり出します。

すぐ遊んでしまい、勉強や食事などにも時間がかかります。集中力が続きません。

小さなことでかんしゃくを起こします。何か嫌なことがあると、次の作業に取りかかれません。

平日はきちんとやろうとがんばっていますが、休日になると、後からやろうとする気持ちから、結局日曜の夜バタバタします。休日の学習はどのようにしたらよいでしょうか？

教師から

- 時間の有限性について図で表します。学習に使える時間を可視化して、自己選択させることが大切だと思います。
- ルールを徹底させましょう。この時は良くてこの時はダメ、ということではなく。
- 自己決定を大切にし、称賛や見直しをいっしょに行う。甘えがでたらしっかり叱る。

3 推進協力校の取組内容

(1) 推進協力校（松山小学校）の取組について

「家庭学習スタンダード」を活用した取組

- 自己マネジメント力の働きかけ
 - ・ 定期的に家庭学習チェックシートを用いてチェックを行い、家庭学習を振り返る機会を設定した。
 - ・ 「学習カード」をもとに、学習の仕方（学習内容、学習時間）を指導した。
- 教師への取り組み
 - ・ 「学校の4つの取り組み」「自己マネジメント力を育む働きかけ」についてチェックし、取り組みを確認し、

課題を共有した。

(2) 推進協力校（上三宮小学校）の取組について

日常の実践につなげた取組

- 研究授業での検証結果をもとに各担任が手だてを改善して日常の授業実践を行った。
- 自己マネジメント力を育む家庭学習の充実
 - ・ 「家庭学習カード」を作成し、全校生が同じ歩調で取り組んだ。
 - ・ 2学期に3ヶ月継続してチェックシートを活用し、自己の取り組みの振り返りを行った。
 - ・ 自己マネジメント力を育む基盤としての生活習慣づくりに取り組んだ。週に一度「生活チェック」をし、児童自らが自分の生活を振り返り生活習慣の見直しを図った。
 - ・ 授業のポイントや定着を図りたい内容を家庭学習や自主学習で振り返りをさせた。

4 3年間の取組から見えた成果と課題

(1) 成果について

- ① 教科担任制については以下の点が成果であった。
 - 同学年の他クラスについて知ることができた。○児童理解が進み学年の中での情報共有がしやすかった。
 - 同じ授業を繰り返すため、授業の質が向上した。○他のクラスとの交換授業がしやすくなった。
 - 教員の専門性が生かされた。○授業や教材の準備が効率的にできた。
 - 同じ教員の指導により、学級間で指導方法に違いがでなかった。
- ② 「授業スタンダード」「家庭学習スタンダード」については以下の成果があった。
 - 「授業スタンダード」を活用した「Research→Plan」や「Check」を意識した授業づくりを行った。生徒が自分を見つめる力、課題設定や課題解決の見通しをもつ力がついてきた。
 - 授業と家庭学習の連動を図ったことで、児童・生徒の学びの幅、学びに向かう力が高まってきた。
 - 授業スタイルの基本を確立し、教職員全員で共通課題の解決に向けて取り組むことができた。
 - 教師が授業におけるつなぎ方（「授業スタンダード」）を意識して実践することで対話的な学びに繋がった。
 - 家庭学習カードを活用し1ヶ月サイクルでR-PDCAを意識させたことや家庭学習チェックシートで振り返りを行ったことで、自己マネジメント力の向上につながった。
 - 「家庭学習スタンダード」は、子どもの「自己マネジメント力」という視点により、家庭学習で何を身につけるべきか分かりやすく保護者に示すことができた。
 - 通信等を出しながら、保護者に対し啓蒙を図ることで、効果を生むことができた。
- ③ 中学校において、少人数指導によって学級数を減らすことで、教科担当の時数負担を少なくすることができた。また、TTや単元入れ替えを行うことで、予算確保をすることなく、教師同士の学び合いが充実した。

(2) 課題について

- 時間割調整に非常に多くの時間が必要であり、担当教科の時数差を埋めるため、空き時間を削る必要がある。
 - ※ 教科担任制は、専門性のある複数の教員が、一つの学年を見ることについて多くのメリットがある。しかし、現状の学級担任制の上に教科担任制を取り入れると時間割調整が非常に難しくなり、大きなデメリットを生む。人的・制度的環境を整えば、高学年においては教科担任制のよさが生かせると思われる。
- 「家庭学習スタンダード」に効果を持たせるには、手立ての工夫が必要である。
- 家庭学習カードを継続して活用するための工夫や、自己マネジメント力育成の盛り込み方等、検討が必要である。また、スマートフォンやテレビ、ゲーム等とのメディアコントロール力も併せて検討が必要である。